

木曾の紅蝶  
泉鏡花作

一

木曾街道、駒ヶ嶽の麓と聞く。――駒ヶ根村光  
蓮寺の住職、卓顛和尚が殆ど神通力を以つての如く、  
血氣盛な村の壯伎に目前見せた幽霊は、裾は固より  
帯の模様おびもやうの繪ゑまでも見えた。

些と、近頃の講釋師、落語家の前座の言草めくが、  
世に幽霊は有るものか、無いものか、と云ふ茶話に  
花が咲いて、壯伎等は、有るものか、と言ふ。

七日の講に居合せた卓顛和尚が咳して、決し  
て無い事はないと申される、と冥途から郵便が來ま  
したか、で古い茶化しやうを爲たのである。

「保昌に對し遺恨はなけれども」

氣の練れた和尚は、覺束ない謠の節で笑ひなされ、  
一ツ濟度のためなれば、明かにお見せ申さう。泊り  
がけに一夜寺に來さつしやい。木曾の谿河に臨んだ

客殿きやくでんに控ひかへてござつて、夜半やはんの頃ころ鉦かね一つ鳴ならさうず  
るを合圖あひづに、いづれも本堂ほんだうに集あつまれよ、と云いふ約やく  
束そくに成なつた。

權内ごんないと云いふ寺男てらをとこが、茶ちやに煎餅せんべいを運はこんだが、五人集にんあつま  
つた客殿きやくでんの徒てあひは、内々ない／＼般若湯はんじやたうの用意よういに及および、湯葉ゆばと  
號ごうして鰯すゑめを忍しのばせたは差支さしつかへぬ。――村むらに、帶たい  
刀御免たうごめんの家いへに次男じなんと生うまれて、小學校せうがくかうの訓導くんだうたる、恚かゝ  
る席せきには無なくてかなはぬ妖怪退治えうくわいたいぢが、

「關せきの孫まご六むさむ、二尺三寸しやくさん」 とスラリと  
抜ぬいて灯ひに翳かざしたは、串戲じようたんにも危あぶなかしい。

百物語ひやくものがたりが、五つほどで途絶とだえる、と谿河たにがはの流ながれ、松まつ  
の夜嵐よあらし、醉系ふ筈はずの酒さけも幽靈いうれいを待まつ身みには、理りに落おち  
る。初手しよては話對手はなしあひてなり、待遇もてなしなり、和尚をしやう  
も一座ざすると思おもつたのが、寂寞じやくまくとして宵よひから眠藏みんざうも  
出いで來きたらず。主人しゆじんなき席せきは尚なほ白しらける。

唯と、人ひとを舐なめたものは古寺ふるてらの大鼠おほねずみで、湯葉ゆばを狙ねらつ  
て、ちよろ／＼と、梁はりから、柱疊はしたゝみを傳つたつて三疋びき、五

疋。

「關の孫六、二尺三寸。」

鼠を追つた勢餘つ

て、曳と立つと、障子を放つて、ふぐりも見よや縁に片足。

「鞭聲肅々ウ夜渡河。」

「ちえすと！」と野良聾して應ずるものは新田の五八なり。

「あかつきにみるせんべいのたいがをようするを。 曉 見千 兵擁 大牙。」

「と劍を流星の

構に取つて、斷崖の下を見下す、 彼方  
の岸なる、山の端に入方の月の影に、瑠璃の如く照

されて、藍にして碧き蓑を、掛けて亂せるが如き急  
流の激する一座、巖の上に、辨財天の御堂あり

街道すべて六十九次、木曾第一の名所と聞ゆ  
る寢覺の里に近ければ、土地のものは、或は、乙姫  
君の祠と申す ー

辨財天の御堂に致せ、乙姫君の祠に侍れ、在すが

如き、月影の端麗微妙の面影に對して刃を振ふ所説

はない。分けて字八ヶ村唯一の豪農松村の主人が注連を張つて齋祀る婀娜に艶なるお小夜と言ふ愛妾が、山越え、畝道、街道づたひ、一里半の路を辿つて、頃日、御堂に日参する、其の人の信心に對しても、大牙を擁すべき處ではない、と件の訓導兩輪の道を兼備へて、新しい歌も遣るだけに、ぐにやりとなつて、

「えへへ。」  
と、張合もなく障子をしめた。

元氣が抜ける、と眠氣がさす。――誰だ最う寝

たのは？

新田の五八、早や、ぐう／＼と鼾を掻く。

正丑の刻と覺しき時、鉦が一音、チーンと鳴つた。不斷なら亡者の寺入、と驚く處を、豫ての約束、和尚の合圖と膽が据つて、二尺三寸を眞先に、續いて二人、それも、うと／＼した奴が起された。新田と最う一人は揺つても、敲いても、他わいなく寝込んだのである。

「摩訶般若波羅蜜多心 經觀自在菩薩行 深般若  
波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空  
空不異。」

と 高らかに唱ふる大和尚の扮装は、墨  
の法衣、錦の袈裟、長帽を頂き、履を穿つて、威儀  
嚴なものなむ。

障子の陰へ法螺の貝をぬい、と出すか、焼酎火で  
三世相の繪を見せるぐらゐが山だらう。で、思侮つ  
た悪男子ども、先づ一つ度膽を抜かれて、遠縁のも  
のゝ會葬ほどに、びたりと古疊に並んで坐つた。

だゞツ廣い本堂に、燈は本尊佛の正面、天蓋の下  
あたり壇に灯した唯一挺の蠟燭である。

「色即是空空即是色受想行 識亦復如是舍利子是  
諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減。」

時しもあれ、眠藏の隔ての、森より暗い杉戸の蔭  
から、ひら／＼と白い影、それが幽霊か、と見ると  
非ず、卓童と言ふ年紀十六に成る當寺のお小僧。豫

て美少年と聞えたのが、剃たてなる青い頭、輪數珠  
を手首に、腰法衣で、色白なのが一倍殊勝に、静々  
と露れて、讀經の和尚の傍に擦寄ると、香爐の蓋を  
コトリと取つて、線香に火を移した 芬と  
薫る 一縷の煙が脈々として、静かな水  
に揺るゝ釣の絲の趣して、所から、美童に並んだ黒  
衣の僧の背高きは、浦島の子の手を曳いた大な鯨の  
状があつて、影か、幻か、夢のやうに氣の遠く成る  
ほどこそありけれ。

「羯諦羯諦波羅僧羯諦菩薩婆訶。」 訶

ともろともに、喝と開けて、大きな口で、ふつと  
消す、消えたは唯一挺蠟燭で、残るは線香の火ばか  
りと成る。

悪男子輩が、ぎよつとする時、其の線香の火が煙  
とゝもに、青小僧の手に、和尚と一所に、本堂をす  
ら／＼と動いて、就中、ことん／＼と賽河原で崩るゝ  
石の、和尚の穿いた履の音。

今にも引導を渡されさうな、活きながら固く成つた頭の上へ、黙々として死灰の如く、瞳の据つた和尚の顔色。

「幽霊を見に參られい。」

「さらりと袖を捌いて向直つたのは、後に従へ、と言ふのである。」

「行かう。」と突張つた聲を出して、訓導が二人を誘つた。

「だがの、新田のたちが憂慮なで。」

と一人が言つた。客殿遙なる處に、遠

灯が映して、ドス濁つた黄色い影に、瓜とも茄子とも分かず、頭を轉がした夥間の寝た軀を、灰色なせる猪のやうな大鼠が七八疋、ちよろ／＼と傳つて居る。日の鼠、月の鼠、草の根を噛む鼠――

「ありや！ 食殺されべい、危い。」

と云ふより早く、あとの一人が眞先に驅出した。續いて一人が慌しく立つて行くのを、

「待てい、君。」と訓導が聲を絞る、と何方へも、行方が知れず、大般若を藏めつらむ、其處に二棹並んだ筈の經長櫃のあたりで消えた。

「來さつしやらぬか。」  
と言棄てに、卓顛和尚、今度は口の裡にして、  
耳鼻舌身意無色 聲香味觸 法無眼界

訓導は物をも言はず、背たけも二尺三寸ぐらゐに縮かまつて後に續くと、本堂から一廻り眠藏の縁を、齊しく線香一點の灯で傳つて、やゝあつて、廁についた雨戸が一枚、さきに用意したらしく開いて居る。

青小僧が先へ、黒和尚が履で下りた。

「卓童さん、お小僧さん。」

「はい。」

「下駄は、穿ものは？」

和尚は傍から聲を奪つた。

「跣足で、跣足で  
故知般若波羅蜜多。」

阿耨多羅三藐三菩提

南天の葉が波の如し。

「權内 ー 權内君。」と、訓導は取留めも  
なく、顔馴染の寺男を大聲に呼んで見た。

「何時ぢや、と思はれる

、今時返事を

すれば、木精か、すだまぢや。

大神呪大

明呪は無上呪

「暗いですな、

眞暗ですなあ。」

「は無等等呪能除一切苦 ー 法衣の袖につか  
まつて、法衣の袖につかまつて。」

唯、つかまらざるを得なかつた。月が落ちた後の  
雲か霧か、丑満時なる、如法暗夜、訓導は心も足も  
宙に浮いて、地底に轟く激流の響きの中なる、地獄  
の路を一足飛、掴んで釣上げられたやうに成つて、  
ふら／＼と着いた先は、廣い墓所の一隅である。

あの、ほろりとした線香の灯一つに、塔婆は恰も  
森々たる杉の樹立に似たる前に、鐵壁にも較へつべ  
き青き一墓の石塔に對して、卓顛の形相宛然袈裟  
かけたる山の如く、

「 故心無碍故無有恐怖遠離

卓童よ。」

指揮のまゝに、青小僧が、身をあとに引いて、跪  
いて、香爐を捧げる、と靡いては消え、靡いては消  
ゆる煙を潛らすやうに、輪にして線香の火をうけて、  
和尚は大きく墨染の法衣の片袖をかゝげ開いた。

「 此の中ながら、透かいてな、墓を覗  
いて見るのぢやい。覗いて／＼」

と申さるゝ。訓導の頭は引掛つて、魚の鰓の喘を  
立てた。

「 卓童よ。」

「 はい。」

「汝も、よう見いよ。――塔婆は新たなれども去年の佛ぢや、折合が悪うてな、

伊豆ノ國伊東ヶ崎の波で果てられた、東京から来てゝあつた、村の杉山の御新造ぢや、五十日の供養をする今夜は三七日

と言ふうちに、聞くうちに、青石の石塔の先祖代々が霧を吹く下に、藤色の手絡を掛けた圓鬘の艶々しく、得も言はれず色の雪のやうに白いのが、柳のしまの衣を着て、黒繻子の帯をめた、帯に、淺黄と銀の縫で、歌留多の模様が、露草の露に水晶の數珠を置いたる状に、褌さきに草を打たして、弱々と膝を立居る。

「南無。」

一念、法衣を合せた時、色ある襦袢の袖口を揃へるやうに、幻の姿は、犇と兩袖を頤に合せて伏拜んだのである。

何と思つたか、二尺三寸、關の孫六を投出して、訓導が、暗の墓所を怪し飛ぶ音は、鼠の梢を鳴ら

すやうであつた。

「羯諦、羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆  
訶か」  
摩訶般若波羅蜜多まかほんにやはらみつた」

震ふるへも帯おびず朗ほがらかに、聲こゑの若わかいは美少びせうの卓童たくどう。

萩はぎの中なかに窓まどがある、萱屋根かやねを傳つたふ朝露あさつゆは、早咲はやさきの  
 葉末はすえを染そめ、炊かしの煙けむりはまだ板廂いたびさしを卷まかないのに、ほ  
 の／＼と薄紫うすむらさきを、靄もやかと見みれば、山家やまがは霧きりが早はや  
 のである。

東雲しのぐめの風かぜに、はら／＼と、夜よもすがら白露しろつゆの玉たまを  
 含ふくんだ、濃こい紫むらさきの、艶つややかなのは桔梗ききょうである。萩はぎは  
 窓まどの下したに植うゑたらしいが、桔梗ききょうの三本もと五本もとは、野路のぢ  
 から咲交さきまじつて居ゐるのであらう。畦あぜの川縁かはべりを掛かけ、山やま  
 の麓ふもとを繞めぐつて、絲萩いとのはぎは、眞萩まはぎは、ちらほらと成なるの  
 に、桔梗ききょうの葉はは、蒼つばきは、門かど、背戸せどを隔へだたるほど、野の  
 面もに簇生ぞくせいする。

此この凜々りんくしたのが、僅わづかに晴間はれまとさへ見みれば、鳥とり  
 の聲こゑより魁さきがけて名告なのおりを擧あげさうなのに對たいして、内うち  
 端はに優しそらしいのは、咲交さきまじり／＼姿すがたを絶すがる女郎花をみなへしで、  
 山やまの端高はたかく、横雲よこぐもが薄尾花すくきをはなに白々しろ／＼と、輝かがやき残のこつた暁あかつき  
 の明星みやうせいの影かげに、身みを墨染すみぞめに面影おもかげを忍しのんで、ほろりと  
 美うつくしい涙なみだを咲さかす。

苳萱は思ふまゝに靡いて、葛の葉といへば、鳴残  
る蟲の息の密と觸るゝにも翻る。その淺緑此の白銀  
紅蓼の紅と、露草の淡い淺黄と、秋草の根を包ん  
で、玉の小川を颯と流す、淀むあたりは藍にして、  
せゝらく水は碧いのである。

此の秋早の一面の花野は、霧の縫目を、幕の中か  
ら、此處、彼處、眉のやうに、瞳のやうに、ともす  
れば、姫百合、常夏、紅さした唇のやうに、曙の土  
間の如き、稻田を覗く面影にして。

駒ヶ根村、寢覺の里に敷詰めた、偉大なる其の一  
霧の幕の、高き大空を縷つたのは、街道一の駒ヶ嶽  
野の花道は木曾路である。

きよきよ／＼と鴉が鳴く。あれ／＼案山子がニツ  
三ツ、稻田に戦ぐ風に連れて、幽にカラ／＼と鳴子  
の音  
ー  
ー

道草を引返さう。

半ば萩は蔽はれた窓には、なか はぎ おほ 雨戸が深く鎖してある。  
が、は 葉摺れに揺るゝ折からの朝霧を透いて、隙間に  
残燈の影が仄に映す。ありあけ かげ ほのか 雫するまで散るものを、よく  
白露に消えなんだ。しろつゆ

と思ふにつけて、おも 其の點とある燈火も、一片の花  
の口紅で、くちべに 萩の葉裏に濃い霧も刷で白粉を染たらし  
い。

言ふのも憚かれ、い 雲に金色の光を包んで、駒ヶ嶽、  
天に在焉。てん

ひらりと朝顔の花が咲くやうに、窓の一處が、裡  
を青白く見せて開くと其處に竹格子が嵌つて居る  
其の格子の竹三本ばかり、ぼろりと内へ抜  
ける、と思ふと、障子は最う明いて居た。

其處へ、すべ／＼した青坊主が、ひよいと出て、  
目瞼のはれぼつたい、色白な顔を上げる、と四邊が  
白んで、早や桔梗だつた野山の朝に、驚いた顔を  
して、やがて、敷居に乗出して踞んだ形が、鼠の衣も  
ので、ちよこなんと裾が短い。宛然顛卷の耳を立て

ないばかりの、踊子の兔に似て居る。

此の兔は、霧の船に乗つて、萩の浪を漕ぐやうに、ゆらりと地に下立つて、しばらくすると、根に忍ばしてあつたらしい、藁草履を穿いて葉の中を潜つて出た。

静な野は、今朝の最初の登場者の爲に、さら／＼と流水の曲を奏ではじめた。此さへ、いら高の数珠を師の御坊の押揉む如く、美童の耳に響いたであらう。――別のものでない。――彼は、光蓮寺のお小僧卓童なのである。

静な野は、今朝の最初の登場者の爲に、さら／＼と流水の曲を奏ではじめた。此さへ、いら高の数珠を師の御坊の押揉む如く、美童の耳に響いたであらう。――別のものでない。――彼は、光蓮寺のお小僧卓童なのである。

卓童か。

さては――この新發意が窓を開けると同時に、

吹込むほどの風も無しに霧に吸はれてふつと消えた  
がーあ、残燈は、佛壇の燈火であらうも知  
れぬ。

思掛けない處から、夢が歩行くやうな姿で出て來  
た。

薄が觸る、と肩をすくめて、胴も据らず、ふらつ  
く状は、流の音にもせゝらぐばかり。衣の袖裾、置  
模様、女郎花の影、桔梗の影、墨繪を映して、小  
川縁を辿るに連れて、水の流が霧を溶いて、薄紫に、  
淡い黄に、其の秋草を染めつゝ通す。

唯、田を隔てた山懐を颯と音たてゝ渡る風が、一  
處々々、彼方此方、一拭づゝ霧を薄めて、齊しく、  
秋草の花の色を蒔繪の如く研出すのが、月夜を走る  
むら雨の雲が晴行く風情である。

流を渡す丸木橋の袂で、卓童が白い顔に莞爾しな  
がら、早や萩の枝に包まれた、其の窓を振り返るとき、  
きよツきよツと山の端に高音を上げたは、歌の時鳥

はこんなものか、と野にも里にも、此のあたり、讀ぬしも有らうものを、誰憚らぬ鴟である。

此に驚いた、眉が動いて、ばねを踏んで渡るばかり、急いで越える、とそれから村の道一筋。

取着的の田三段、路傍によつ曳いた案山子殿が、がさりとした笠の中から、

「お早えなう。」と、もつそりと顯れる。

はツと退つて、罪のない、兩の頬邊をフウとふくらまして、一息吐いて、すた／＼と通る鼻の尖へ、のツほりと、小山の形、霧に映つた駒の影、横道を曳いて出る、轡の音が、しやらんと響く。

卓童は、たじ／＼もの、いや、今度は胸をさすつて居たが、早や近いた蹄の音に、一層恐るゝ顔をして、やがて、ひた／＼と走出す。

此の折からである。

件の窓の竹格子に、鼻筋の通つた、眉の優しい、

抜けるほど色の白い恍惚とした面影が。

あの、色白な青坊主が、抜出した窓であつて見れば、勿體なくも瓔珞を掛け、天衣を着け、鳳凰の玉を挿頭した端嚴なる御姿でなければ成らぬに、

また餘りとは媚かしく婀娜めいた、雪の素膚に藍染の、水のやうな胸も露に、櫛巻の黄楊の櫛。

袖も亂れて白い腕を、薄の葉蔭に生ふる  
と聞く、おもひ草の白きが如く、投遣りに連子に結んで、黒髪ばかりが重さうな、眞綿の頤をスツと載せ、頬杖して、夢を水晶にして嵌めたと  
見える、薄ら睡さうな黒目勝なのが、流を流晒、丸木橋、其の路筋の行方を視遣つた。

此の風情は、寛いだ其の温い乳房のあたり、鳩尾に、引結ぶ水色縮緬の、蒼白い尾を曳いて、ふはノと、魂が青坊主の頭に成つて抜出して行く趣である。

駒ヶ嶽が、地軸を踏んで轟かした。

霧きりの中なかなる汽車きしやの音おとに、目め覺さむるばかり、はつき  
りと成なつて、見返みかへす瞳ひとみが、桔梗きくやうの紫むらさき、女郎花をみなへしの玉たま、  
萩はぎの露つゆ。

ともいろに色いろめく此この婦をんなは、駒こまヶ根ね村むらの里り正せいなり、舊きう  
家かなり、豪農がうのうなる、松村傳むらまつでん四郎しろうの愛妾あいせふ、お小夜さよなの  
である。

いまの丸木橋のあたりが境界で、松村屋敷の此處は裏手。で。母屋をはなれた此の萱葺の一棟は、今は世にない祖父が物好きな茶室に擬へそれも假初に拵へたのが等閑に成つたものである。屋根には森の落葉堆く、外壁に葛も這ひ掛る。

時に

腕を解いて、窓に手を支直して、

半身にすらりと立つた。それなり脇をしめて袖ぐるみ膚を壓へたが、お小夜は、苟も主ある婦の、扱帯も紐も、襖をしめては居なかつた。

腰は細く、中脊なり、其のまゝ、する／＼窓を脱けても出さうであつたが、唯俯向いて見たのは、穿ものゝない事らしい 一度萩の花に姿を分けて、ついと障子を閉めつゝ隠れる。

やがて、カチン、と錠を開けて、其處にすく／＼とある、霧がくれの松の幹の代赭色した巖乗なのに、藍の薄い浴衣で、華奢に對して顯れた。爪尖に松の

枯葉、片山里の夜すがらや、落葉は縁にも散敷いた  
り。

枝を透かして、下男、下女、三十人餘りがまだ起  
きない、母屋の白壁を流眊に視ながら、庭下駄を掛  
ける、とこぼるゝ、夏の雪解のしどけない、白脛かゝ  
る水淺黄。  
流れまつはる浴衣の裾を、じ  
れつたさうに手に取つた。

腰帶をしめては居らぬ。

そして、ぐる／＼まきの投遣りに、端を突込んで、  
たぐり上げた、だらりと柳に落したのを、いま巻手  
繰つて締めたらしい、落ちた松毬に庭下  
駄の裏を見せて、突掛穿きに、指を反らして歩行き  
／＼、帯の其のわがねた處を一寸うしろ手  
に抱へて居る。が、勿體ないことながら、年代記に  
此のあたりへ降つた、熊野、鹿島のお札よりも、此  
の黒縹子の丸帯の模様が目立つ。浅黄と銀を縫交ぜ  
に、藤袴、露草の艶をもたせ、露も大さも同じに散  
らした一面歌留多の繡なのである。——いく夜寝  
覺めぬ須磨の關守。古里寒く衣打つなり。戀しかる

べき夜半の月かな　――　讀人の姿繪は、幻の蝶を  
彩る、萩に、桔梗に女郎花に。　――　お小夜は窓  
の前に出た。

いや、澄まして、出たゞけでは濟まなからう、黒  
縷子に歌留多の帯は、伊豆國と云ふさへ國の隔る

伊東ヶ崎の荒海に消えた、美女の記念であ  
る。おなじ姿を丑滿の墓原で、卓顛和尚が、墨染の  
法衣の袖から覗かせた線香の火の影法師である。

怪むべし、帯は幽霊と同じである。が、お  
小夜は村のものが素性の知れない婦人と云ふばかり  
――　決して幽霊ではないのである。

地獄の繪、白髑髏を裨襠に染めたも有つて見れば、  
幽霊と對の帯を、もの好きに誂へたかも分らない。  
が　――　寧ろそれよりも不思議なのは、傳四が  
千金にかへた愛妾と聞くのが、苦蒸し、落葉かさな  
つた、此の離屋に獨住みの事であらう。

仔細の無い事ではない。

朝霧の晴行くまゝに、萩の葉摺の窓の横なる、蔦

の掛つた古壁の一處に、あれ／＼ストーンと弓の貫いた如き穴があつて、其の周圍に注連を張つて、打つけた白木の枝に、二種ばかり木の實、果物取交せて、鶏卵を一所に、供物に備へたのが認められよう。

お小夜が、何か心願あつて、寢覺の紅御堂と稱ふる辨財天に日參した事は前に言つた。七七日、五日が満願、で、まだ満たない、三十四五日の事であつた。

作男が六七人、田の草取りの八ツ上りに野面を歸つて、件の丸木橋の袂で、小川へざぶ／＼と入つて、根こぎの牛蒡十四五本泥脛を洗ふと、夏の末ながら赫と照つて、分けて西へ廻つた日の眞赤な中に、一人涼しさうに、水の滴りさうなお小夜が、卜路の秋草の根に居て膝に慎ましやかに袂を掛けて、片袖を一寸皓齒で銜へて、雪の二の腕を伸すと、女郎花の莖を摘んで、そして、臺に咲いた桔梗を見て居る。明石の羅に、紹縮緬、絲菘の葉と白百合の友染の長襦袢が、はらりとほぐれて、八ツ口に透いて媚かしい、其の時はまた珍らしく島田に結つた、二十五六に吃驚するほど、よくも似合つて初々しい。

唯、其處まで、手でも曳いて來たらう。眉の釣上つた、眦の下つた、唇のだらけた、八字髯のいかつがましい、抜衣紋で、白縮緬を胸高にぎゆつと云ふどうにも始末に弱る、五十ばかりの年配は、お旦那の傳四郎。此あるがために苗字も出來た、亭々たる松の蔭に、あの板縁に腰を掛けて、片手に、乳色の女の涼傘をさしながら、片手で、巻蓑をニチャ／＼と脂を濃く吹かし／＼、默然で、向うから斜違に、お小夜の頸筋から、帶腰を、じろり／＼と見てるだよ。

「桔梗が咲きましたわね。」

唯、言掛けられる、と、五六人ばちや／＼の男どもは、いつに、變らぬ姿ながら、さて江戸繪がものを言ふと魂消た處へ、分けて殊勝にも、尊くも、天女の御堂へ日參とあるにつけ、辨財天の、のりうつゝてまします心得、聲さへ迦陸伽に聞えて、うつかりと口も利き得ず。

「朝から萩も、ちら／＼と

」

其の言ふ口も、唇も、皓齒も、袖もちら／＼と。

「ひやあ、貴女様へ御馳走だんべい、今年はえら  
早咲でがんです。」

と、七十五に成る老僕の仁右衛門が、はじめて挨拶を打たつした

「辨天様へお初穂を摘みませう。」

「ぢやば／＼、どか／＼と小川を上る、水の音に驚いたか、跽音に騒いだか、山の根近う小田を包んだ浅茅生の根よりして、ばつと凄じい羽音が舞立つ。」

「雉子だ。」

「ケン／＼。」

「山鳥よ。」

と老僕が言つた。其の鳥は、空に隠蓑を投げたるが如く、長い尾を颯と曳き、怪しき影をはら／＼と、打つて、駒ヶ嶽の半腹へ飛んだのである。

途端に、其の影を、土ながら衝と切つて、眞赤に閃いた一筋の紐がある。

鳥が掴み状に落したか、追はれて草の根を抜けた

か、はずみを打つた勢で。ひら／＼と、畝つた鱗が、西日の光に、燃ゆるが如く赫と輝き、首を空さまに上げた、と思ふと、するり尾が地を二三尺。一尺ばかりの小蛇ながら、人の目に稻妻の影を射つゝ、翻然と刎ると、凄じい、壁を外から衝と透して宙を飛んで、あの、萱葺の下へ消えた。

「やツ。」

と言ふと、――壁を破つて、部屋を突抜けてゞも襲つたほどに――蛇なんぞ、ビクともせまじい大盡が、縁を怪飛んで駈けて来る。

お小夜は鳥の影を見送つたなりの、すらりと立つて、雪の小腕、袖高く、手を前髪に翳したまゝ餘りの事に、恍惚として立つて居た。

赤棟蛇だ、と男どもの口々に言ふ中に、

「否、岩徹といふ蛇ぢや。壁などは愚なこと、岩をすぼりと抜いて行くだ。滅多にねえ、

希有なものよ。」と仁右衛門老僕は、鍬の柄に皺

手を支いて、兩の頬桁を、膨らましたり窪ましたり、  
ばく／＼と息して言つた。

が、お小夜の心では、何うも辨天様のおつかはし  
めらしく思はれる。否、確かに然うに違ひない、寢覺  
の紅御堂から、此の屋の棟の裡へ影向の御影に相違  
ない。

傳四郎が第一に頷いた。

仁右衛門は小首を捻つて居たが、掌へ吸殻を轉が  
すと、それも赤い。

「成程、然うかも知れましねえて。」

お小夜は、自分が日參中の、此の不思議の奇特で  
あるから、離屋へ籠つて、三七日、精進潔齋の勤行  
がしたいと云ふのを、思入つて、やがて陳べた。

此には仁右衛門が眞先に合槌を打つた。

然もあるべし、老僕の了簡では、お妾が何も物干  
で花火を擧げるの、鐵灸で緋鯉を拱れの、と云ふの

でないから、第一入費が掛りません。

—  
精進潔齋  
—

傳四郎は太い眉と、下つた眦を口ぐるみ、ぐる／＼と動かす事、野呂間人形の胴中で繰の糸を搔廻すが如き顔色して、

「精進、潔齋と云うて、しかし、其は

旦那、空腹がるには及ばない。粹に、ものわかりのした御愛妾は、唯其の離家に於てのみ精進潔齋なのであつた。

召さるれば、何時でも母屋の御居室へ媚かしく參上する。が、其のかはり然りし時々は、朝とも言はず、晝、晩、夜は言ふまでもない。背戸の噴上げの井戸にかゝつて、帯を掛け、衣を解き、紐を離して、白身、素體にして黒髪に水を浴び、雪の膚を濯ぐ。そして、茶座敷へ引返す。

家には病人ながら妻があり、可い年をした悴もある。かな聾だけれども目の明るい祖母が達者で御座るし、三十人に餘る眷屬の見る目がある。

傳四郎、此には弱つた。

で、次第に母屋へ呼出さない事に成つた。話せば婦が、世馴れ場擦れて、故と水を浴びるかとも聞きなされようが、斷つても辭むべき事を 金  
子に購なはれた身の淺ましい、寧ろ可哀である  
冥利を知つた妾、お小夜は温良貞淑である、  
おとなしい婦だ、と此を知つたものは言つた。

尤も其は後の事で 燃ゆるが如き朱の一  
條の小蛇の、壁を穿つて入つた日は、 ー ー 精進  
潔齋で、

ー ー じぶくる旦那を、嬌態で羨し目で酔はせて、辛うじて承知をさせた。 男どもは休  
んだ足で、すぐに離家の ー 御納屋々々と下男  
どもは呼んだ、御の字をつけるだけ納屋よりは聊か  
ましぐらゐであつた ー 其の掃除をはじめて、  
雑と用意の出來た處で、お小夜は母屋から引移つて、

こゝに籠つて、もの齋を修する事に成つたのである。  
注連引結へ、供物を備へて

この、供ものについてだが、菓子、くだもの、中にも鶏卵で、假にも蛇に備へるのであつて見れば、なまが可然であらう、と、言ふものもあつたけれども、女心に、お小夜は、おつかはしめのめしあがる事ゆゑにで、五ツばかりうで玉子。

「蛙が一等だんべい。」  
お先ばしりな勘吉と云ふ下男の若藏が、猿芝居の安達ヶ原、はらみ女の腹を割いて引摺出したと言ふ形に、ぶらりと、下げて来て、窓の前へ、目前へ突出した事がある。

あの、露のたりさうな目で、熟と視られて、勘が立竈んだ處へ、  
「堪忍して下さいな、私が嫌だから。」と、お小夜が遣瀬なさうに、身を揉んで莞爾笑つた。

勘吉は、其の場から震出して、瘡だと云つて、い

まだに寝て居る。以来、下女、下男の松林を通るものが、誰も、御納屋を等閑にしなくなった。

夜は、内から、ガツチリと錠を下す。豪家の事とて、火の安心、盜賊の警戒に、夜番が廻る。拍子木と一所に、傳四郎が時々、此の注連を張つた御納屋を見巡る。

既に昨夜も来た。

登音が、縁外で留まつて、咳の聲がすると、お小夜が御納屋の裡から、先んじて、

「別にかはりはござんせん。」

カーイ、カーイ、と野に響き、山に應へる拍子木の音に交つて、カチノノと鳴つたのは、傳四郎が、恸うした折には、御納屋の周圍へ切火を打つて行くのである。松林をまはつて、カチ、と鳴らす、拍子木と一所に、窓の前へ、念入りに廻つた傳四郎が、萩の葉をざら／＼と分けたのは、いつも其處から、窓の隙を覗くので。

「別に變りはござんせん  
お小夜が、もう一度聲を掛けた。蚊帳には遮られた、が、ほの白う、胸もほのめく。但し起直つた枕を片手の、流れたやうな裾を巻いて、黒繻子の帯の模様の歌留多が、色紙の如く其の蚊帳は、淺黄と銀を透して――もの齋の女は、寝るにも衣帯を解くべきでない。

傳四郎は、清く尊く、美しいものに思つた。且つは水垢離を取られたばかりの夜である。

カチノゝと切火の音　――カ―イカ―イ。と拍子木は松林の外がこゝる、裏山の根に遠ざかつた。

（お小夜が櫛卷の事も、讀まるゝ方は略、御合點と思ふ。）

さて、其の翌日の今朝なのであつた。――

――旦那がけがれを忌み、不淨を拂つて、切火を掛ける萩の窓から、お小夜のしどけない白い胸を

抜けて、どんなものがスツと出たらう。

お小夜は、萩の前にめぐつて出て、流れの流るゝ、  
荳の靡く方を、霧を透かして、もう一度見送つて、  
ずらした帯も、落ちた裳も忘れたやうに、おくれ毛  
を搔いて莞爾した。

「可愛い人

」

けゝこつこう！

「あゝ、今朝は大變に寝忘れたがねえ。」

」

母屋の鶏の聲に振り向いて、注連と小蛇の壁を見た。  
林檎が残つて、うで卵が無い、此の御供物は、どん  
な邪な神がきこしめすやら、其處らにぼか／＼と殻  
が散つた。

散つた殻を、

「ふツ。」と微笑を忍びながら、お小夜は、帯  
の端がはらりと葉に敷く、蹴出を手繰つて小褌を膝  
に、懐紙に一つづゝ拾つて、すつと立つ時、木曾路  
に一人、花野の霧の駒ヶ嶽を遙に望んで、片頬笑み  
して、水に流す。

と卵たまごの殻からは、懐紙ふところの筏いかだに乗のつて、藍碧らんぺきを走はしらす細さい流りゅうに、桔梗ききやう、苳萱かるかや、女郎花をみなへし、草くさの中なかを圓まるい小坊主こぼうず、青酸漿あをほぐさのやうに流ながれて行ゆく。

時分じぶんも丁ちやうど此この時とき、卓童たくどうの鼠ねずみの衣ころも、青あをい頭あたまは、村むらはづれの藪おほやぶを抜ぬけた。が、其處そこに鎮守ちんじゆの社やしろがある。

唯と、金色こんじきの絲いとの如ごとく、森もりへさす日ひが一度ど立籠たてこめた霧きりに消きえて、鳥居とりゐの中なかから横面よこづらへニばつと當あたると、射伏いぶせられたやうに、搔かすくんで、腰こしつくばかり、散ちらばつた藁わらの上にうへに踞しやがんだが、密そつと起おきて、兩手りやうてで頭あたまを抱かへるや、否いなや、鳥居とりゐの前まへを怪飛けしとぶと、瞬なはてに成なつて、本街道ほんかいだう。桔梗ききやうはおなじ、女郎花をみなへし、路傍みちばたの田たの一處ひとこゝ、粟畑あはたけの茂しげみへ潛もくつた。

背後うしろから鐸すずの音おと。

此これに追掛おひかけられるやうに、すた／＼走はしり。

「遅おそう成なつた。」

赤蜻蛉あかとんぼが、スイと飛とぶ。

「遅い。」

今は左右の蕎麥畠を、山の峽に見るにつけ、

「門前の蕎麥屋、もう起きて居はせまいかなあ。」

「摩訶、般若波羅蜜多、羯諦、羯諦、

波羅僧羯諦

」

四

「  
観自在菩薩行 深般若波羅蜜多時照  
見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異」

師の御坊卓顛和尚の朝看經の般若の聲が、東雲の雲に響いて高らかに聞えた。

此が、お小夜の懷中から、尾を曳いて、ふはりと御納屋の窓を抜けて、夜明の人魂、花野を飛んで、卵塔場の馴れた抜路を潜込んで、庫裏の傍の椎の樹の下へ來ると、鐘の如く響いたのである。

お小僧剩へ耳が押立つて大いから、襦が上に鳴渡る。

寺が近く、一里塚の蔭から透かすと、途中すがら懸念した門前の蕎麥屋が起きて居た。それさへ怯乎としたものを、御坊の般若は容易でない。

凡そ、近頃一月あまり、毎夜さ忍んで御納屋へ通ふが、何時も、明けぬ間に明星を道伴にして歸つて、

一寝入たわいなし。

「お小僧、お小僧、卓童さんてえば。」  
権内が揺起したぐらゐで起きるものか。

「ごほん、卓童よ、卓童よ。ごほ、ごほん、卓童！」

「はい。」と、師の御坊の苛高聲で、漸つと寝惚けた返事をするのが習であつたに。――

卓童は一すくみに耳を壓へてすくんだ。が、ふと、熊笹をがさ／＼と駈出して、境界の塔婆垣を越え、と、街道續きの横田畝へ飛出す。朝晴の野は見渡す限り白露の海である。霧の目覺めた草の花島。卓童は桔梗も萩も女郎花も、手當り次第に、我毛香、常夏もちら／＼交りに、手折引折、枝の撓ふのは唇に黄を含み、齒に紫を嚙んで食切つた。

星月夜の花、嫁菜の花。

此の優しいのに鬼酸漿も、慌てゝ摘交せて、水引草を、かゞるが如くにやがて一束。

繪心ゑしんに持もつのでない。花屋はなやの丁稚てつちが暴あばれた状さまに、  
兩手りやうてで肩かたに引擔ひっかつげば、花はなの中なか、葉はの中なかから、白しろ露つゆの  
青坊主あをぼうず。

いや、薄すすきが穂ほを揺ゆつて噴ふきだ出せば、芋いもの葉はが腹筋はらすぢを  
振ふつて笑わらふ。

今度こんどは故わざと大廻おほまはりに、眞正まじやうめん面の門もんへ出でると、潜戸くくりど  
が開あいたばかりを、ちよろりと入はいつて、鐘かねはあるが、  
近頃ちかごろ撞つかず、權内ごんないいまだ筭はしを當あてない、鐘樓しやうろうの前まへを  
眞直まっすぐに、段だんを上あると直すぐに本堂ほんだう。

「色即しきそく是空ぜくう即そく是色ぜしき受想じゆさう行識ぎやうしき。」

それ、其その聲こゑも大おほい筈はず、卓顛たくてん和尚をしやうが、佛前ぶつぜんに打向うちむか  
つて、釣鐘つりがねを伏ふせた如ごとく、臺座たいざに結跏けつかでおはします。

ひよいと卓童たくどう、其その背後うしろを、いつも爲した事ことのない  
折をりかゞみ、七尺しちしゃく下くだつて拜はいをなし通とほり抜ぬけ、横疊よこたぐみをち  
よろ／＼と傳つたつて出でて、須彌壇しゆみだんの前まへの大花瓶おほはないけに、星ほし  
月夜づきよから、嫁菜よめな、水引みづひき、花はなは霧吸きりすふ露つゆながら、遮しや二

無二、あるが上へ、挿込み揉込む。

卓顛は、見たりや、見ずや、一息の句讀も切らずに、

「故心無二礙故無有恐怖遠離一切顛倒。」

卓童つけ唱みに爲るつもりなのが、魂も一切顛倒。

「不生不滅不垢不淨。」

不垢も不淨もあるものか、と甲走つた聲を突走らしつゝ、其の女郎花、我毛香、撫子の花奉る。

「阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多。」

慌てゝ、つけ直す。――袂に入れて持つて行つて、お小夜に可愛いと言はれた思出の酸漿で目を突きなから、ぽつと赤くなつて、

「故知、般若波羅蜜多。」

師の坊が、

「羯諦羯諦。」

此處は確で。

「羯諦羯諦。」

「波羅僧羯諦。」

「はらそうぎやあてい。」

「波羅僧羯諦、菩提薩婆訶。」

と　　ぐわん、もん／＼もん／＼／＼／＼

と響く中を、師の坊はのし／＼と、卓童あるに目も  
くれず、眠藏さして入りにけり。

卓童お小僧、思はずも、口の裡で、

「舍利弗、舍利弗。」

とぞ呟いたる。但し大和尚をあげたのではない。  
自から、智慧を稱へたので、手向けの秋草、圖に當  
つて、朝歸りの不首尾、先は無事。」

で、燈明の灯に莞爾して、あらう事が、酸漿の紅  
を弗つと吹く、と、あの滑々とあるのを頬へ、

「おつば。」

と我知らず口へ出した。

「卓童よー」卓童よー」  
眠藏から和尚の聲。

「はい。」

お小僧些とも驚かず、今はしも平時持つて行く朝  
茶参るのであらうと思つた。

臺所へ行かうとすると、

「卓童。」

「はい、はい、はい。」

と安心喜びの氣輕な返事で、本堂を、衝と飛び、  
襖で、踵をかさねて、圓い腰で、ちよこんとして、

「はい。」

と甘えた愛嬌聲。

「汝や何をして居たや。」

唯見ると經机を斜めに無手と坐した師の御坊の肩  
越に、見通しの障子を開けた、谿河の中流なる、紅  
御堂を遙な空、晴渡つた朝霧と反對に、御嶽の峰、  
一抹の漆雲。卓顛和尚の額を掛けて、眉が光つて黒  
かつた。

「は い、草花を摘みまして。」

「それからや。」

「佛様に上げまして。」

「それからや。」

「御經を唱へまして。」

「うんや。」

ぶる／＼と頭を掉つて、

「それから と言ふは、其の前の事ぢや。」

前はや。」

「」

「其の前はや。」

「目、目が覺めまして。」

「うんや、目は覺めぬ。其の前はや、前はや。」

「寢て居りました。」

「うむ、寢て居つて、それからや」

「はい。」

「それからや。」

「何も存じませぬ、はい。」

「何も知らぬ、卓童？ 出をれ、前へ  
出い、後退りをするな、出い。何も知らぬな、卓童。」

「存、存じませぬ。」

「これ、あの女は、あれは何ぢや。」

「婦と言ひまして？」

「それ、歌留多の縫の黒縷子の帯をしめたよ。」

「あ、あれは幽霊でございます、はい。」

「幽霊な。」

「唯々、あの、お上人様のお法衣の袖から覗きま  
して、可哀でなりませぬ。修行にも成りまする

墓へ参つて、あの、夜さり御經をあげまして、  
をがんで遣はします  
「と頭は青く、白々、

と云つた。

が、これは半ば事實であつた。

方便以て濟度いたすは、佛は申すまでもない、日  
参なさるゝ辨財天の御心に合つて功德無量阿耨多羅

三藐三菩提と、お小夜を説いて、傳四郎が此を計ると、目ざす幻の本尊が、古今の美婦であつた、と云ふのが、第一お旦那の氣に入つて、當夜は傳四、門前の蕎麥屋にて後見し、内々權内が石塔の背後に踞んで護衛して居たのである。

其時、寺に納つた身投げの美女の記念の帯を渡されて、貸されて借りに締めた歌留多の縫が、膚にひ入るばかり、心に滲みて、お小夜は何うしても離されなかつた。立派な布施して授つたのである。

唯、殊勝とも、奇特とも、年紀も十六の新發意が、宇宙に迷ふ女の魂をかなしんで、夜な／＼卵塔の、其の墓へ經を手向ける。聲が聞える。谿河の響もやむ時、澄渡つた其の聲が、冥途の路に通ふやうに、凄くも尊い。此沙汰が傳はつた。

傳四郎、巾着ぐらゐな大な口の紐を弛めて、「はゝはゝゝ、一番小僧を怯して遣れ。」

「面白うござんすわね。」  
御祝儀で、凡て秘密。蕎麥屋の奥へ忍んだが、刻

限が来て果せるかな、松蟲の鳴くやうな、すゞしい  
寂い墓原の細い讀經の聲を聞くと、幽ながら月もあるのに、元來わが家の松林さへ、夜ふけに一人では  
覺束ない臆病な傳四が、身震ひをして、止める、と言ふ。

「私が一人。」

で、絹絲辿る月の草路、笹を足袋跣足で、塔婆の中へ、すつくと立つた、藍出の浴衣、黒繻子の帶の歌留多は、怨靈が鎧つた裳、青地の錦の色に出た、  
其時のお小夜の姿は凄艶なものであつた。

逃げも、倒れもする筈か、いきなり、飛寄つて、  
絶り着く。

「あゝれさ。」

「消えないで下さいまし  
お願ひでございます。  
御本尊のお顔も何も、皆、貴方に見えます  
のでございます。」

「お小僧さん、御經のお禮に参りました。すぐに  
お分れ申します。私は成佛しますわ。」

「成佛しないで下さいまし、迷つて居ておくんないまし、  
否、御經ではございません、  
幽霊に口の利きやうが分りませんから、お話を  
氣で唱へて居りました。」

「まあ、口を利いたり、身を寄せたり、私と一所  
においでになると、貴方、お生命がありませんよ。」

「えゝ、大事ございません。」 「一所に冥途へ  
いらつしやるかえ。」  
「はい、参ります。」  
ときつぱり言ふ。

お小夜が熟と手を取つた。

「未來が思遣られますよ。」  
「佛道修行成就して、極樂へ参りたくありません。  
貴女となら、針の山も、血の池も。」

「否、まさか。――ですけれどね。」

水にて亡せし我身なれば、今も同じ水底へ、と宙



「お小夜さんは紅い魂。」

「卓ちゃんは白い魂。」

で、あらう事か。お旦那傳四が、切火を打つて行  
つた後で、――お小夜も可い加減な年増で居な  
がら――昨夜の蚊帳の幽霊ごっこ。緋縮緬に刺  
へ、紅の蝶々を絞つた、ちら／＼燃ゆる女の扱帯と、  
白金巾の坊主帯。

「ほら、ひゆうどろ／＼／＼。」

「おほ、こはい。」

ぐる／＼絢交ぜにしたるを其のまゝ、きよとんと  
締めて居たのである。

「権内ごんない

権内ごんない

「ひやい。」

みし／＼と音おとがして、寺男てらぎこの権内ごんないは、卓顛たくてんの居間ゐまに、狸たぬきのやうな顔かほを出す。

和尚をしやうは寢床ねどこの上に片膝かたひざして、銀ぎんの俵張たはらばりの煙管きせるを握にぎつてござつて、

「談話聲はなしこゑがするやうぢやがや、庫裏くりへ誰たれぞ來きて居をるかな。」

「ひやい。」

と團栗どんくりがしひなに成なつた、薄目うすめの顔かほがとろんとしながら、

「刻限こくげんは、まだ早はええでございませうが、幽靈いうれいが参まゐりやしたで。」

「何なに、小僧こぞうが首くびでも縊くつたか。」

と煙管きせるを落おとすと、権内ごんないはニヤリ／＼で、

「違ちがえます、ひやい、えら婀娜あだな別嬪べつびんの幽靈いうれいでござえやすが、山門前さんもんまへの蕎麥屋そばやから、自分じぶんで白鳥はくすやうを提さげて参めえりやして、何なにとも、へい、白しろい、細ほそい手てで、

酌しやくをしてくれますで。」

「ふむ、汝われに酒さけを飲のませてや。小僧こぞうは何どうした、  
と聞きいたるがや。」

「魂たまげ消けたな、お上人しやうにん様見通まみとほしておいでなされます  
だい。」

「權内ごんない。」

「ひやい。」

「汝われは、さて喋舌しやべつたか。」

「はい、承うけたまはりましたよ。」

破襖やれぶすまの暗くらい蔭かげから、櫛くし卷まきのお小夜さよが、同おなじ黒くろ繻じゆす子  
の歌留多かるたの帯おびで、雪ゆきの頸うなじで、すつと出でた。

和尚をしやうは、じろりと見みた。そして默然もくねんとして權内ごんないと  
兩方りやうほうの顔かほを見較みくらべながら、此これも手酌てじやくで飲のんだらしい、  
枕頭まくらもとの膳ぜんを片寄かたよせる。

「や、えら鼠ねずみが騒さわぐ。」

と、權内ごんないは思出おもひだしたやうに、ばたすた、と庫裏くりへ  
走はしつた。

「御寮人、おいで。」

「御免なさいまし。」

と襖をがしめて、うつむいて手を支いた、耳許の  
艶な事。差俯向いて、

「お上人さん、私は何にも申しません。」

「然よぢや、何も申されんが可えな。」

唯、お小夜が顔を上げた。

「何うぞ身に代へましてお願いをいたします、お  
小僧さんを堪忍して上げて下さいまし。」

「はい？」

と横ざまに耳を出して、口を開けたは、故とらし  
いが、實際障子一重縁の外は、山も峰も動かすばかり、  
凄い水の響きである。

「何とや？」

お小夜は優しく座を進めて、

「お小僧さんを堪忍なすつて下さいましな。」

「はあ、卓童をやーいや、先づ、和女は、

何うして家を出てござつたな。」

「黙つて参りました。」

「あはん、毎夜の刻限、卓童が和女の懐中に入らんもんぢやで  
今朝の紅い紐のふしだらにも気が着いたりな、様子を  
見に来たのであるがや、道ならぬ事ぢや。」

「はい、懺悔なりといたします、道なりません處ですが、冥途を歩きますも、おなじ、ことを、いたしました。」

「ぢやからな、自業自得よ。何事も佛の思召しぢや。」

「でも、貴方、御出家は人をお助け遊ばすのが、お勤めではございませんか。」

「如何にも、私の方  
は其の氣でも、佛の思召は仕方がないがや。」

「では、佛様の思召しと言ひますものは、水が出ますんでございますか。」

と、何故か、我を忘れたやうな、うつかりしたことを言ふ。

佛の御心は計り知られぬ。が、駒ヶ嶽、御嶽、槍ヶ嶽、堂々たる大峻嶺が、目に餘るにせよ、目立つにせよ、お小夜と卓童の媾曳ぐらゐに、天が下の憤怒を激發しさうな事はない。中にも、懷紙に卵の殻をのせて流込まれた如きに肚を立てたとあつては、この木曾川たるもの、美濃路へかゝつて、名を並べる、天龍川にも顔は立つまい。

が、結果は然う言ふ事に成つて居る

「腰に附着いた幽霊を見る。」

今朝一喝を食はせた上、朝飯も食はず。大和尚は卓童を引立て、卵塔の中なる、あの、幽霊の顯れた石碑の前に土下座させて、

「此處を動くな、神妙に。」

お小僧は仰せのまゝに動かなかつた。腰に巻いて居た緋の扱帯の、其が餘りの事に、肝魂を挫がれて、ぐつたり氣抜けがしたらしい。――其うち、うと／＼して、やがて、ぐつすりと寢込んだ。

「起きろ、白痴め。」

午過ぎである、襟首を取つて引起して、大和尚が叱りつけた。

「謹慎の最中に、寝込むなと言ふ、不埒な奴、参れ。」

ぐい、と手を掴んで引立てゝ行つたのが、不思議にも、初めての契にお小夜に誘はれたとおなじ熊笹の細路を、崖へ出て、其の巖角の足がかりを二三段づゝ下りて行、つた。

「お上人様、目を瞑りますか。」と、卓童が身をすゝめて言ふと、

「白痴め！生命を奪るではない。」

小僧は大巖の頂なる紅御堂の中へ封じられた。木の曾の激流の藍碧なる波の中に、辨財天の臺の御座は、世に蓬萊ヶ巖と云ふ、礎を繞つて、御堂の影に、水は紫に繞るのである。

「許すまで出ては成らん。」

卓頭が引返す時、飛々傳ふ巖の狭間に、底澄む緑青の水の底から、水銀を散らしたやうな、晃々／＼しい無数の泡が、湧立ち、盛り出でするのを見て、ふと、四方の嶽々峰々を二した。が、まさかに、と其のまゝ歸つた。――點燈頃である――突然、鐘樓から大釣鐘の落ちたる如き物凄い音がすると齊しく、何處ともなしに、わつと鯨波を揚げて大勢の異様な人聲の響いたのは、山津浪の一種で、ともすると此の木曾川の水上の驟雨に、千疊ばかり、古疊を積んで倒すが如き濁流が、倒落しに押し来る其なのである。瞬く間もない。水は、それなりに少しづつ量を減ずる事もあるし、岸を掛けて溢るゝ事のないでもない。が、此の種の洪水は、家を流し村を漂はすことは殆どない。崖が高く、底知れず深い流であるから。――雖然、寺から見てさへ、恰も目の下に成る中流の蓬萊ヶ巖の安危は計知られぬ。勿論、唯一瞬の其の出水で、不斷でさへ、爪先が氷で切れさうな岩飛の橋は、幾十丈の深い底と成つた。然も此の夜の水は、二寸

一寸、刻々に其の水嵩を増すのであつた。

懐紙の鶏卵は、まだ浮ぶ瀬も頼まれよう、木曾の濁流に道を断たれた、紅御堂の青坊主。

お小夜の言つたのは其である――

「もし、お上人様。」

和尚の黙るのに、やゝ忙つて、

「お小僧さんは何うなりませう、ねえ。」

「此の水がぢや、夜の中に巖を越せば、そりや是非に及ぶまい。がな、其ほどにも無かりさうぢや。」

「まあ。」

と斜めに摺寄つて、

「無かりさうだなんのつて、そんな便りない事を何うします。私や、最う恚う云ふうちも居ても立つても居られません。」

「御寮人、それがために、夜通し、恚うして、私も権内も起きて居る。俄水には橋も無

けりや、此の流に、天の川の船も出せぬ。外にいたしやうが無いではないかい。」

「無いがではありません。餘りなことをお言ひなさいます。――他に仕方がないからだつて、澄して視めて居られますか。」

「大丈夫ぢやよ、あん。」

と北叟笑をして、じろりと視て、

「お小夜さん。」

「えゝ。」

「何、お小夜どのか。酸漿見たいな小坊主一匹に、憂身をやつす、和女でもあるまいがい。木曾にも男は澤山ある。」

唯、お小夜の瞳が、活々と輝いた。

「はあ、白魚が蝗に食はれて居るんです。――

素性も大抵お察しだし、信州でいけなけりや、臺灣でも樺太でも、男に不自由はしませんが、幽霊を可懐しがつて、手を曳かれた其の場から、すぐに冥途へ行かうと言つた、あんな人は他にはない。私は一念發起しました。抱くと暖い玉ですも

の、白いのと紅いの色は違つても魂は同一です。水の勢ぢや、不斷でさへ、ぐら／＼端れるやうな巖

の上うへに、唯一たゞひとり人、此この浪なみに卷まかれて居ゐる、あの人ひとの、弱よわい心こころを察さつしますと、恐おそろしい流ながれの音おとが、雷かみなり様さまより胸むねに響ひびく。もう、乳ちくがうづいて堪たまらない、和尚をしやうさん。

と夜衣よぎの袖そでを、淺黄あさぎの蹴け出しで、ずつと抜ぬけて障しや子うじを開あける、と欄干らんかん際ぎは、雨戸あまとが二枚まい、様子やうすを視みるのに閉しめずにあつた。

面おもてを拂はらつて、霧きりを鎧よろつた白しろい波なみ、岩いはに激げきする水柱みづばしらが、怪あやしい神かみが宙ちゆうを飛とぶかと、ふわ／＼と來くる、颯さつと通とほる、續つづけざまに哄どつと行ゆく。

蓬菜ほうらいヶ巖いはは飛沫しづきの虹にじの地獄ぢごくである。

「あれ、和尚をしやうさん、此これですもの。ねえ、叶かなはないまでも、叶かなはないまでも早鐘はやがねを撞ついて、人ひとを集あつめて、松明たいまつなり、提灯ちやうちんなり、此方こつち岸ぎしから、火ひと人ひとの勢いきほひで、力ちからをつけて上げて下くださいまし。男衆おとこに聞き

いたんぢや、出水でみづで仕方しかたがない、ト言いつて棹さそでも届とどかない、晩方ばんがたおむすびを竹たけの皮かはで投なげたけれども

吃驚して、氣を落して、受取る元氣もないかして、御堂から顔も出さなかつたつて云ふぢやありませんか。」

あゝ・昨夜・御納屋の供物棚から卵子を三つとつて食うた新發意は、不思議な運に出會つたのである。

「そんなぢや、水がつかうとつくまいと、氣死に死んで了ふも知れない、何うしたら可いでせうねえ、――卓ちやん――卓ちやん

流の音に聲も消えつゝ。

押入が開くのをみると、和尚が細引の用心繩を手繰出す。お小夜は、心忙した氣もそゞろに、生命繩を投げる、と思つた。

「あれ！、  
「騒ぐな。」

小腕を捻ぢられ、姿が亂れて。

「何をなにするんだ。」

「じたばたするな、助たすけて遣やるのだ。小僧こぞうは小僧こぞうだ。汝われのやうな了筒れうけんぢやあ、氣きが上うはずツてな、飛込とびこみかねない、助たすけて遣やらい。」

と言ことば葉はも荒あらく、力ちからの強つよさ。背手うしろでに引縛ひきしばつて、柱はしらに繫つなぐ・と、も一つ戸棚とだなから摘出つかみだしたものを何なんとか見みる、——訓導くんだうが墓はかへ置あいて遁にげた——二尺じふせき三寸さんすん、關せきの孫まこ六。

ギラリと抜ぬくと、ニえ崩くづすお小夜さよの褌つま、膝ひざのしめ木ぎにずばと刺さした、疊たゝの土壇どたん。

古夜具ふるやくぐるみ、尻けつへ搔かつて、上胡坐あげあくらに、ニ乎どつかと組くむ、と肋骨あばらに傷きずのあとのある、這胸しやむねをはだけた、腹はら筋すぢに卷込まきこんだは、緋縮緬ひぢりめんに紅べにの蝶てふ、卓童たくどうがしめて歸かへつた、お小夜さよが腰こしの帶おびである。

「お小夜坊さよぼう、見みてくんねえ。」

「では、言ふことを肯かないと、お前さん私を殺すんですか。」

「然うよ。」

と尖つた頤で搦つて、卓顛、倒に顛卓大王、飲あまりの寢酒をちび／＼と舌鼓して、

「一度俺が手に掛けて、幽霊にして引導を渡した汝だ。其の血は補血の薬に成るとよ。俺

も取つて六十七だ。些と長壽の禁呪をしねえぢや成らねえ。上州無宿の宅五郎を、活動寫眞でも見て知つてるかい。女子の一人や二人、鱈より仔細はねえ。」

蕎麥屋で内々の仕出しと見える、何の鍋やらの、そゝぎ牛蒡を混ぜ／＼りして、

「待ちねえよ、殺すにや殺すが、刀はやめだ。此方も危え。實あ一目見た時から生命も要らねえ氣に成つたが、小僧にだらけたくだらなさぢや、考へて

見ると解死人は割が悪い。

此奴は一見合

せか。」

と柄を手許へ、ツカリと刀を疊に倒して、

「面を見せろい、助けるんぢやねえ。補血薬を頂いた上でな、絞殺すのも一寸、手だが、いきなり縁から木曾川へどんぶりこよ。尾州濃州へ流れ着いても、紅御堂に小僧が居りや汝が血狂つて身を投げたで事済みだ。はゝはゝゝ、さすがは老功六十七歳。

姉え往生をしてえねえ。」

「ぢやあ、殺されるだけぢや濟まないんですね。」

「然うよ。右の長壽の一件でな。」

「私が、こゝで殺されても、お小僧さんが助かると極つたと言ふ譯でもなし」

「知れた事よ。」

「まあ、詰らない。」

お小夜は引緊つた膚ながら、亂れた衣紋の、眞白な肩を左右に振つて、

「おい、繩をお解きよ。」

「何だ。」

「一寸、坊さん幾千金がお出し——と言つた處で、現金ぢやあ、ろくに、お賽錢もありやしまいねえ。貧乏寺だ。馬鹿々々い

血を飲まれた上に、殺される、そんな操を立てたつて、浪花節の貞女ぢやなし、何の禁呪にも成りやしない。其のくらゐなら、すなほに成つて、此方も長生をするのが利だ お前さん、また、まつたく、殺しかねない人相だからね。釣鐘の賣れるまで、揚代はお帳面にして置くからさ。」

「あはん、姉御、分りは早えな、日本一。」

和尚は何とも、叩くばかりに額を撫で、

「俺も實はな、下から出たり、這つたりな、割口説を遣つたんぢや、逆もいけさうもねえお前の人相だと思つたから、突然荒療治に掛つたのよと云ふが此方の人相だ。六十七歳、堪忍しねえ。

人相と人相だ。三世相の因縁だ。」

お小夜は解かれた手を、だらりと、

「おほ、痛い。」  
膝を直さうとして、ぐたり、と成つて、倒した刀  
に襖を敷いた。

「危い、刀が。」

と、抱く處を、柄を取つて返すが疾し、諸手に取  
つて胸でドン、と突込んだ。白刃の切尖、優い拳が、  
卓顛の脾腹を刺して背へ抜けたかと思はれる。唯、  
大の字に拳か握つて、眞蒼な大口開いて、噛みつか  
うとした和尚の齒より、帯を落してのしかゝつた、  
お小夜の肩は、其の頸は、其の櫛巻は高かつた。

ぐわつと湧く血に押返されて、だく／＼と抜けて  
出た、お小夜の拳に、腸の如くまつたのは、結  
目を解いた緋縮緬、鏢を和尚の疵に蓋して、手を離  
して、すつくと立つて、唯其の扱帯を、天井へ、  
翳すと暗く紫に、灯に寄せたれば紅である。

「わあ、人殺し。」

障子の穴から、覗いて居た狸の権内、立ちざま遁  
げようとする腰へ、伸掛つて、スツと出て、小腕丁

と、毛だらけの手に縋つた。

「おとつさん。」

「羯、羯羯、羯諦羯諦羯諦」

お小夜もせい／＼と息を吐く。

「水が飲みたい、おひやおくれ。」

「水か、水だ、波羅蜜多、臺、臺、臺所。」

と、かく／＼とする権内にお小夜もよろめく身を

凭つて、半分寝たやうな體の運び。で、本堂裏をふ

ら／＼として、あの・伊東ヶ崎で水死した

美女の位牌も納る、位牌堂の板廊下へびしや／＼

と渚の跫音。滴らして鮮血を敷く。

お小夜は水瓶から、柄杓で汲んで、吻として息を

吐いた。袂を口に引銜へ、

「汚らしい。」

で、其瓶で、――情人と所帯を持った時、根

岸で漬菜を洗つたやうに――ざぶ／＼と扱帯を

洗つた。

血を濯ぎつゝ・細い音で、

（男だてなら、あの木曾川の、  
水の流を留めて見な。）

庫裏を、すらりと出て行くのを見て、爐ばたに目  
ばかり光らした権内が、途端に、本堂へ駆込んで早  
鐘を撞鳴らす。

焼けるやうな響を離れて、墓原の月に、冴えた聲。  
（水の流れはとめても見しよが  
）

峰と峰の中空に、其の半輪の月影は・濁流の色を  
逆に映して、黒く長き帯を虚空に曳いた、流は危く  
崖を溢れて、渦巻く霧は赤いのである。

巖は煙のやうである。御堂の棟のみ薄紫して、月  
は唯其處に蒼白い。縁に出て踞つて、松明、提灯の  
光をたよりに、此方を伏拜める青坊主の新發意は、  
あはれ、魂棚の酸漿の影法師、草に離れた露蟲の姿  
が見える。

「卓ちやん、卓ちやん　ー」

お小夜は群集に取圍まれつゝ、

「弱蟲。聲も聞えない、確乎おし。」と、白や

かな腕を空に、唯、肩をうしろに引くと、扱帯が光

つて宙を飛んだ。山鳥の尾を曳いた、緋の蛇か、紅

の蝶か、ひら／＼と御堂の前へ。折しも松明の散る

火がこぼれる。

「危いよ。私が行く。」

思が届いて、縁の下に落ちた扱帯を見る、とひよ

ろ／＼と卓童の欄干を越えむとして、蹠跟いた時で

ある。

飛ぶともあらず、すいと出た、お小夜の裳が巖角

を離れると思ふと、水煙の中を立つて歩くと見え

たが、黒縹子の帯が高波の大畝りに敵つて、片端が

月影に靡いたのである。空を貫く水一筋、月下の雲

がおなじ状に揺いで、きらりと冴えた歌留多の影。

ー　木曾の流れは留めても見しよが　ー

帯の、前の持ぬしも、想ふに、あはれな戀の歌ぬ

しならむ。

木曾の流れは留めても見しよが　ー

【完】